筑前國續風土記 卷之四目錄

称 東夷 櫛 博 辻 入 大 博 定 名 長 之 乘 寺 寺 田祇園 寺 寺 祉 多 聖 荒 妙 妙 明 龍 綱輪天神成就院 亞 宫 樂 光 福 寺 守 寺 뱎 寺 津 善 **今熊野** 社 石 法 IE 承 袖 性 定 導 天

寺

凑

寺

堂

寺

寺

筑前國續風土記 卷之四

貝 竹 貝 原 原 篤 定 好 古 直 信 校正 編錄 選定

田

博 多 那珂郡に屬す

清和天皇貞觀十一年、 問;;其來由;遠投\風。これ博多の名の國史に見えたる(* か立けん、しれず。今案るに、 博多は古來唐土船の着 始也。此時すでに博多津の號あり。 言、新羅人辛波古知等二十六人、漂言著筑前國博多津、 に、仁明天皇の御宇、新羅の人筑前大津に來るといへ を置れし初より、 し所にて、太宰府に近ければ、異あり。上代は太宰府 日本後紀曰、嵯峨天皇弘仁五年冬十月庚午、太宰府1 大津は博多を指ていへり。三代實錄十六卷に 博多町も立けるならん。續日本紀 太宰權少貳坂上大宿禰瀧守奏 其初いつの時に

亦石城 ģ 舟の著く港をさしていへるなるべし。偕萬里が梅庵 鳥津、又號;冷泉津。といへり。 唐土の書には、博多を 境有,,鳥津、有,,十里松。浩云、石城即筑前博多也、有,, 集に、送言超公然叟歸省「詩序云。超公然叟石城人、其 艘筑前國那珂乃荒津留到來天云々。今案に、前に博多 要云 とあり、後に荒津と有は、博多荒津一所也と見えた 文に、去年六月以來太宰府言上すらく、 年二月、八幡香椎宗像等に勅使を立られける。其告 二十二日夜、新羅海ധ乘"艦二艘,來"博多津。同十二 して云、謹檢、博多は是隣國輻輳之津、警固武衞之 ける也。海東諸國記にも、博多或は冷泉津と稱し、 たるにはあらず、博多の倭音を聞てかくのごとく 然ば博多は町をさして云、大津荒津とは博多の 140 府共 りつとひし所にて、 花 又曰貞觀十一年六月十五日太宰府言、去月 旭塔、八角島などゝかけり。 いふよし見えたり。 太宰府に近ければ、 日本に上世より異國 是は別に名 新羅賊船二 いに

御車の は 廷に告る申文あ 朝野群載第二十卷, 作に與宿所と云事あり。 にも行啓あり。 吳「以示||威武「以備||非常」といへり。古老の云傳へ 西海、諸蕃朝貢、州檝相望、由、是簡:練士馬、精;銳 武士を多くあつめ、兵器を多くおさめらる。 日本紀、光仁天皇寳龜十一年勅に曰、筑紫太宰僻,,居 のさかんなる事を異舶の人にしめしけるならん。 れば、西方の外藩として武備を專にすべき地なる故、 つかさどれる官府にして、殊に異國より來る渡口な は床を前 海濱に遠ければ、 へより繁榮の地なる事むべなり。 天智天皇太子にて西國に下りたまひし時、 転のつか ひきくして、 此時の 50 へし故に、前をひきくせりと云へり。 博多の海邊に藩營ありて、 其文に 博多津に中華船の來りし事を朝 例なりとて、 今は訛てこしやどと云^o おくに一段高き所あり。 日 博多の富商の家 太宰府は九州を 太宰府 兵衞 博 12 是 甲

警固所解 中請申文事

新來唐船壹隻子細狀

右件唐船今日酉時筑前國那珂郡博多津志賀島前汽 到來者 任;,先例,子細言上如、件以解

長治二年八月廿日

鎰口田吉任

くった とすい す。 此博多津は當昔唐土船のつどひし所にて、我日本のためなる。 する所。三津たい坊津を惣路とす。客船往返に必ずよ伊勢に鳴三津たい坊津を惣路とす。客船往返に必ずよ 長治は、人王七十三代堀川院の年號也。右の記 西海道に坊津、薩摩州に属北旭塔津、筑前州に属洞津 國に三津あり、皆商船の聚る所、海に通ずる江也 せしなるべし。警固所とあるは、 を以て見れば、唐船入津の時毎に、かくのごとく言上 ならし。又大明の茅元儀が著す所の武備志日本考に、 花旭塔津を中津とす、地方廣濶にして人煙湊集 中國の海商此地に聚らざるはなし。 い中津にはあらざる物なし。とかけり。げにも 地方又山城と相近けれども、貨物或備り或缺 本司兼監代百濟惟助 此津守護人の居所 洞津を末津 せし所

向ひ、 らべ、富人門をつらね、肆にはよろづのたからおほ b, 今も他國 を見侍るに、東は箱崎の松原につらなり、 國 民所を得て、繁榮の地なりしとかや。今此所の形勢 肥前筑後豐前豐後に通じて往來しげし。 て隣國に道通せり。就中南は平原の地長くついき、 かに見えわたりて、 ふ事なし。 無を交易せし故に、民生日用のたから備はらずと へだてゝ腷鬨についき、南は住吉に隣り、 よりも 民生日用の食貨ともしからず。 萬の資用を買とゝのふ、此故市中にぎはひ、 まことに四方編輳の地にして、 那太 東に石堂川あり。 の商舶爱にあつまれり。三方は地廣平にし 此所南北の中程に、 九州二島は、 の白濱、 各其土物をのせて、爰にあつまり、 海づらのながめきはまりなし。 志賀島、唐泊、能古浦など、はる 市の中には編戸の民軒をな 博多を一都會として來り集 古は東西に通れる入 且古寺名刹また 天府の邑とい 西に那珂川 北は海に 西は橋を 有

友殿と分ち領せり。小貳は西南四千餘戸、大友は東 h 跡 六千餘戸とあり。 内家繁榮の時は、 良にいたり、 しける也。其事は古戰場の記に詳にしるし侍 りて日本をせめしかば、防の備のため、 の海濱に異賊のふせぎのため、石壁を築きしが、く 海より北を澳の濱といふ。 て、大内氏より治む。澳の濱は大友の領なりしといへ る海づらには、石壘長くつらなりて、東は箱崎多々 海有て、 れり。此時の治むる所かくのごとくなりしにや。然る 人の筆作にて、成化七年に成る。我朝の文明三年に當 。今是を大水道と號す。又むかしは澳の濱の北のみわづかに殘りて、橫一間許なる溝東西に通 海東諸國記には、博多の居民萬餘戸 りしを、 袖の湊と號せり。是唐船の入し湊也。 文永弘安の比、蒙古の賊兵しば! 西は今津に及べり。是は上古より此邊 此海東諸國記といへる書は、 袖湊のス海より南を守護領と號し 今は入海はなくなり、 、小貮殿大 石壁を修補 30 此 其 な

たくおもへる者は、わら屋を結び、昔をしたふ輩 六月三日箱崎にいたりたまひ、 又兵火に焼れて焦土と成ね。住なれし里の立さりが ほどなく降参あり 造寺度々合戦ありしかば、 事を武備志に百里ついけりと書る類なるべし。文明 の服ぜざるを攻めんとて、九州に下向し給ふ。 ありしに、 より後大内氏と大友家と、 るを聞傳て、妄に信じ、かく書たるならん。 くは當昔わが國の人其事を張皇して、異客にかた 餘戸を容るべき地なし。諸國記に記せる所は、おそら 地を見れば、 に此時博多全盛なりといへ共、今の繁榮に及ぶべか も築出して其地甚廣まれり。今を以て入海より北 し時、度々燒失し、天正の時に到りて、叉大友家と龍 **今は袖湊の入海も悉く人家となり、** 天正十五年春三月豐臣秀吉公、 昔の澳の濱に倍すべし。 しか ば、歸りのぼらせ給はんとて、 此地をあらそひて合戦せ わづかに殘りし民屋さへ 二十餘日逗留したま 然ども猶六千 島津義久 十里松 北の海濱

云者、 斤也。一此時天王寺屋宗及是を取っぐ。又秀吉公の命端、沈香一此時天王寺屋宗及是を取っぐ。又秀吉公の命 to 客居せしが、 る。 **多年に京着して、京大坂境にて茶道に名ある僧侶に** 茶會に召れて近侍しける。 招き茶の會あり。 翌天正十五年正月三日大坂御城において、 會せり。 十月の末に唐津を出、長州赤間關より舟に乘り、 我數奇の程をも世上にあらはさんとおもひ立、 下に名を得し茶人千の利休、天王寺屋宗及等に會し、 さゝぐ。此宗湛はもとより茶會を好みけるが、其比天 錺の道具共拜見す。 り、博多に到り給ふ。此時博多の富商神屋宗湛 其時石田治部少輔取持、所々の錺名器共見せし さて進物を獻じ、秀吉公を拜謁す。進物は虎皮二枚、 兵賊の難をさけて、 秀吉公此事を聞召て、甚感じたまひけるが、 同十日博多の址を見たまはんとて、 博多に來り、 此時宗湛をも同じく召て茶を賜は 是より逃寵をうけて 秀吉公を拜謁 かりに肥前松浦郡唐津に 諸大名にも招請せらる。 L 諸大名を 進物 南蠻 去年 度々 仲

翌十二日より町わりをしたまふ。其經營は黒田孝高 吉公筑紫に下り給ひし時も侍候しける。 此所の老人共を呼出し、博多の町を十町四方に定め、 竪横の小路をわり、民屋を営み作らせらる。其時連 に仰付らる。 叉秀吉公の弟大和大納言秀長卿、 山崎志摩守、 く、兼てより秀吉公の恩顧有し者なりしかば、今年秀 たまひけるにも登謁し、懇遇を蒙る。 一折與行せらる。 秀吉公博多町を立んとて指圖を書せたまひ、 小西攝津守等也。下奉行三十人あり。 奉行は瀧川三郎兵衞、長東大職大輔、 秀吉公の御句に、 大和の 六月十一 郡 かくのご 山 12 H

博多町幾千代までやつのるらん

其前句は黒田孝高の叔父休夢、

凡 博多の津は、 立ならべたる門のにぎはひ 當昔異賊防禦の所として、 且太宰府

りは何北を縦とし、 の通路なれば、 北を外面とし 東西を橫とせり。 南を内面とし、 南の方の外郭 町

傳は 通り 門を立たる所をば、今も矢倉門と云て、 所に在りしといふ。)秀吉公の此町を再興したまふ時 向耳川にて、薩摩の兵と戦で死す。 明暦の 初や うやく饗・鎮次共に天正六年十一月十日日 明暦の 初や うやく 坂をほり"鰻賽を置き"柑子が岳には其弟日杵新介鎮吹を置かれ、鑑事を司どる。道書立花山の城にうつりし後"助の爲博多に砦をかまへ 元亀の始まで、志摩郡柑子岳の城に居、志摩郡の政所と號して郡中のにて、立花道雪の母養孝院ハ兄なり。大友氏の命をうけて、天文より ほらせたる堀なれば、 其土堤今もあり。 より辻の堂の東に至る。 掘も、 づ す。屋宅も廣くして、おほく かど、其堀の形残りて今もあらはに見ゆ。又西一面 は 奉行人むかしの故實を尋、南北を縦とし、道を廣 かに残り、 てありしが、いつのほどにかうづもれて、 、横二十間餘 り。(其昔承天寺盛なりし時は、 縱町凡九筋有。 むかしは兎町のうらより袖の 片原町のうらにあり。 の堀 是は其始日杵安房守鑑度と云し人 0) 房州堀と號す。 跡 むか 是を南方の要害の固とす。 ありて、瓦 し太宰府へ通じ、 は富人居れ 町の 彼寺の 博多の 羨まで南北に 大友宗 50 其の名 西南 南方に **一 安房守**は 南 田 しと成 且又 判此 今は O) すみ

宅を賜 れば、 地 者も來り集りし で此 心 多 ばは、東四にて横町なれば、ふるきによりてせばる。是他國往來の通路也といへども、博多の內道 珂川に中島を築き、博多に通じ、博多より石堂口を出て箱長政福岡の城を築、東西に外郭をかまへ、大門をひらき、博 神屋宗湛、 HI 唐 のごとくすたれたるをおこし、 とぞ成 前名護屋に往來したまひし時、 地 0) て な 船 の名は既に提要上卷に記したれば、爰に記 病家は発除される して、 人のあ 町を立たま O) るべし。東西を横として道せばし。屋宅 着 は 人 富 b, 12 l? 人はまれなり。 し海邊に通ずるが爲に、 安堵の け 島井宗室兩人ともに、 各本土に立歸 つまる事もとの 永く丁役を除かれしかば、 る。文祿元年、禿吉公朝鮮 かば、 を蒙 ひし 思ひをなし、 30 カコ ば、 b ょ 其 5 **今博多町數百十三町** 後世すでに でとし。 博多の者共再世に 思ひ 近き者 絶たる 昔に立歸 十月晦 表 南北 此時博多の富 しのは ロ十三間半に 無事に 征伐 をつ は の路 に居宅 今に至る h 悅 秀吉公 日 いで、 の び もせ を廣 0) 崎にいたの間那 朝、 繁 剧 出た さず。 を立 72 • あ 条の か ば 遠 彼 ţ 屋 彻 け 0 せ

皆大君 也。 返らざるべけんや。 然るにいにしへより太平日久しければ、 をもて、其比は猶古代質朴の風有りし事をしりぬ。今 す して枝をならさず。されば天が下の人高きいやしき、 四海波靜にしてちりをあげず。 の天下の主を屈請せし家なれど、 夢一人也。 ておごりをこのまんとは期せざれ共、奢おのづから 來る。其時の宗湛が家今に殘れり。 宗湛が家に 大名衆近習衆十餘人侍る。 ż 常 今は國君郡司を請待すとも、 ð, の習なれば、 御相伴は織田有樂 めて、 の徳によりて、枕席をやすんずる事を得たり。 質素をいやしむ。 御茶 かゝる俗習を改め、 秀吉公を請じ奉りて、 の時休夢一人召出され、次の 凡貴も賤きも、 古風をしたふに心あらん人 一人也。 是盛世の俗弊にて、 隣の宗徳座敷にも 七の道風おだやかに 御前の通ひは みづからかへりみ 甚狭かりなん。 いと矮小 いにしへの醇 茶をする さばかりの富 人の心な なる家居 間に 小寺休 人多 め 饗應 情

になれ し後、 其後大友義鎭威勢をふるひし時、元祿二年より豐後 天文二十一年より今寳永六年までは、凡百五十八年 はなくなりぬ。 年まで、 あせて埋れ、長政公此國を初て領したまひし慶長五 府内に異舶を著たり。 り集れ 嘆美すべし。 船の來る所にて袖湊と號す。 日本の渡海やみね。此後は博多に異舶の來る事なし。 内家にありて、博多に大明及西蕃の國 の質朴なるありさまを見ば、 b 勘合の印失ぬれば、翌二十一年より大明の船 り。天文二十年義隆其臣陶尾張守に弑せられ 其間わづかに四十九年なりしが、 博多の入海は、 土地變遷の速なる事かくのごと かゝりしかば袖湊もやうや 近古は大明勘合の印大 いにしへよりもろこし かならず感を發 よりも商舶 此 一時袖湊

法式は先貧人をやとひ、福祿壽、夷・

大黒天の形にこ

しらへ、馬にのせ、かうべの上に蓋をさしかざし、囃

博多にて正月十五日に、松囃子といふ事を取行ふ。

大小 詞と 今に至て年々絶ず。(伊藤宗巴 五年より寬永十八年迄中絕せしを、忠之公の命に依合せる 酒肴を賜り退出す。城より歸て櫛田の祠にまうで、 重をのせ. はあやまりて、 をはじめける。 里人おほく重盛公の恩惠をかうぶりければ、重盛の 先博多に下して**後**に、 千雨を大宋國へ渡し、 には、高倉院御宇安元元年小松內府重盛公、黄金三 又崇福寺に叁り、博多の市中を通る。古老の云傳へ て、寛永十九年正月十五日より博多の里人再興して、 楽の謠 やし 後に及で、其恩を謝せん爲に、正月に松囃と云事 をとなふ。 の鼓、太鼓を打て祝言の舞をなさしむ。國君より の歌に、 の曲節あるみじかき謠物をうたひ、笛ふき、 舞衣をきせ、 終りには小なる假閣に車を仕つけ、 松やね 松殿や 是より毎年恒例となれ 育王山へ施入せらる。其使を 宋に渡されけり。 (小松殿やとうたへり。今 事を引て國君の宅に到 - 小松やね!~と云。慶長 いふ者 90 もとは武士 此時博多の 其步行の 小

住す。 頂香は、 をつぎて透頂香を賣て家業とす。又相州小は住せず,今も京都西洞院四條上る町に、 透頂香を甚稱美ありて、京都西洞院に宅を給はとうなか 再 な 其子孫世々透頂香の秘方を傳へて、 嚴院應安二年に、 主人酒肴を出 に住し、 る事なし。)陳員外郞と云者唐土台州の人なり。後光 舆 ħ 上京して將軍義滿公に種々の合葉を獻ず、 の時、 HJ 透頂香を賣らし じむ。 外郎が家製の藥なる故、透頂香を外郎と名づ めに松囃彼が門前に 々の長たる者、皆彼が家に往て祝儀を 亦京都 北條氏政の時、外郎が家僕を小田原へ 甚心力を用て專これを主どりし 故有で商家となり博多に住す。 市中をめぐり終て後、 して燕饗す。 にも住せり。いつの時より 亂をさけて日本に來り、 To o 今に其子孫傳は 今其子孫に至て此例か い たり、 又相州小田原の透 彼松ばやしを 祝言を 代々久しく りて彼所 其子孫 博多に かっ 放 v 松 博多に のべ ば ひ、 遣 博多 就 其 P は 出

****0 透頂香。本方、此二家より外に傳はらず。 透頂

香を日本にて製せしは、 博多を初とす。

0古 歌

つくしよりのぼらんとてはかたにまかりけ

るに館の菊のおもしろく侍りけるを見て

大 貮 高 遠

後拾遺

とりわきて我身に露やおきつらん

花よりさきに先ぞうつらふ

兼

昌

堀川後百首

うなはらや博多の澳にかゝりたる

もろこし舟にときつくるなり

としずし、ことには、カー

俊

賴

から人の志賀の小島に舟出して

同

博多の澳にときつぐるなり

國

基

舟出せし博多はいづこつしまには

しらぬ新羅の山ぞ見えける

隆

源

同

我戀は博多をいづるからふねの

ゆたのたゆたひ追風をまつ

慈

鎭

•

めづらしや是や博多の唐の人

名にもことばもあらぬ事かな

O荒 津

荒津といへるが、つと、とと、通音なれば、今は轉じて 荒戸といへるなるべし。 但博多は其町を云。荒津は其船のつく所をいへるな の崎ともよめれば、博多の邊より荒戸山まで、すべて るべし。然れば大やう一所にして別也。古歌に荒津 三代實錄に、那珂郡荒津とあり。博多の事をさせり。

無

名

草枕旅行君を荒津まで萬葉十二

おくりてくれどあきたらずこそ

無

名

同 荒津の海我ねさまつりいは ひてん

はや歸りませ面かはりせで

作

者

不

詳

売津の海鹽ひしほみち時はあれど 同t七

いづれのときか我こひざらん

白妙の袖のわかれをかたみして同十二 同

荒津の濱にやどりするかも

衣

笠

奥津風荒津の濱のなみまくら

ならはぬ物のねんかたもなし

神さぶる荒津の崎によする波萬葉十五 士 師 稻 足

まなくやいもにこひわたるらん

O

袖

湊

いに し港なり。昔博多の東北に入海あり。 しへ博多にありし入海を袖湊とい 西北より入て ふ。唐船の入

髪替かく けし放也。 洲なり。中海東北の方はひろく、西北の方はせば を大水道と云。 と本岳寺の間より、港橋まで東西に溝通れりと 入し所なり。中比奥濱-云し所は、入海の中にありし 西北の方今の港橋ある邊に長き橋ありて、通路 し所なれば は斥地の中を流て海に入る。入海は今の寺町の にといまり、 邊までは、 東南に りしとかや。又博多の西南も今のかたはら町、港橋 。此入海博多の中を打めぐりて、袖の 海と西北の大海と相通ず。是を中海と云て、唐船 なりしかば、 港橋ある邊まで、博多の中間を打めぐり、 į, の たり、 今博多と松原との間に流る 皆西北の海に臨めり。海水此邊の少東南 でとし。 さばかり大なる港なるべきに、 **猶其東南は斥地ながくついき、** 袖湊と名付しにや。今博多の入定寺 是袖湊の残れるなり。 住吉の邊堅糟のあたりまでも斥 港橋と云も袖湊の 残れ 唐土船 かたちの ム比惠川は、 る溝 古今の 東 0 那 泊 とせ 西 珂 地 カ> þ

むか て那 珂川に入ぬ。 しは住吉と博多の間を流れて、 博多の東北には昔は川はなく **兎町の西** 0) 澄に て、

袖湊の入海ありし也。

惟 宗 忠 宗

浪こゆる袖のみなとのうきまくら新後接懸

うきてぞひとりねはなかれける

後深草院少將內侍

おもひつゝ糟千載 いはねばいといこゝろのみ

さわぐは袖のみなとなりけり

中 臣 祐 臣

同

うへにはさわぐこゝろならねば

られじな袖の湊による波の

津 守 國 助

同

泪ぞふ袖の湊をたよりにて

月もうきねの影やどしけり

從二位 行 家

年月は泪のさわぐ我が袖の線後拾遺

婆やこひのとまりなるらん

助

蘆間なき泪の袖の湊にも

さはるは人のよるべなりけり

前大納言 爲 定

いかにせんもろこし船のよる方も新拾選十二 しらねにさわぐ袖のみなとを

宫

うとかりし唐土船もよるばかり4五百

袖の湊をあらふしらなみ

定

家

千鳥なく袖の湊をとひこかし續古今冬

唐土船のよるのねざめに

こひわぶる袖の凌のなみまくら新續古今 前大納言 忠 良

いく夜うきねの敷つもるらん

光

俊

暮れば袖のみなとを行く螢

さわぐおもひのほどや見ゆらん

有

家

同

まつら潟袖の湊にこぎよせん

唐土船のとまりもとめば

爲

家

同

とこの海に流 n てお つる泪川

袖の湊のさわぐ名もうし

式子 內 親 E.

影なれてやどる月かな人しれず糠後撰

夜なし **ヽさわぐ袖のみなとに**

櫛 田 社 博多町の境内にあり。以下皆しかり。祇園社附、

方に向 **b** 此 なりしが、 **社むかしは南向にして、** 祭る所の神三座、 Ů, 御祉を改 近き世より社地はもとのまゝにて、 め造れり。 中殿は櫛田大明神、 社の前太宰府往還 鳥居も寅の 方にたて 左殿は天 寅 通路

若子命 退治 命 年藤 六代 照 の は素盞嗚尊也。 即幡を撃て輙 平らげにまか を勸請す。 日 津 城 には 神 と名を給 カコ ば原純友誅伐、 國 は、天御中主尊十八世の孫、彦久良伊命の祭の祭祭のの みは二 ż 孝謙天皇御宇天平寳字元年に、 神 よそ 澳 祇 合 なり。垂仁天皇御宇越國の凶賊阿彦と云者を 同十三日に本祉に歸座な て合戦 せ 園祉を勘請 右 U) 祭り 濱に 月五 故に櫛田を以て本社とす。 E ^ 殿 þ ひ侍 は祇 れとて、大岩子命に勅して標劒を賜ふ。 渡御 0 出に、 あり。 退治せしかば、 し事は、 • 此神鎮座の始は、 伊勢にも櫛田の社あり。 園 しと 初度の追討使小野好古朝臣 せり あ 大 明神 ţ 輔 神 り 奥澳濱に と云っ此節 て 0 ^ いつの事にや詳 E な 助を祈らんた 6 夷祉に h 其功を賞して大幡主 0 波御ある 奉る。 櫛 个 朱雀院御宇天慶 軍郡に見えたり。田祇関鎮座の説、 は 河 田 絕 內 社 櫛 1" まり 75 め、 國 þ 田 は 今は神輿渡 47 叉 Š T 0 0) 阴 觗 御子大 六月 ず 此 神 \pm 櫛 お 所 O 園 四 は 天 协 田 北 Ł 祉 そ 多 四 狄

都 此事今に至りて絶ず。 げ、社前にすゝめ、其後博多町中をもてありく。 て、かねてより博多の町に來りつどひてやどる者そ はり、 幟をさゝせ。 こばくなり。 どをまなび、衣服甲冑をきせ、或は兵杖を持せ、旗 り、上に人形やうの物を、すべていにしへ有し故事な て高く臺をこしらへ、まはりをきぬにてつゝみか 六月十五日に始れり。むかしは作り山の數十二あり、 博多津中を昇もてありく。これは後花園院永享四年 猿樂をも取行ふ。又此祭に大なる作り山をこしらへ、 御 いつの時よりか其敷へりて六となる。其式樣は木に の祗園にくらぶるに、其制甚大也。殊に京都にか の事はなくして、六月十五日に祇園の祭禮あり。 毎年異なる模様を作りかへて、 日のあつき盛なるにおしあひて所せく。 國中の男女、 さまん~のしわざを作りて、是を昇捧 作り山の通る所は、見る人ちまたにみ 隣國の遊客、作り山を見んと 此日は近所の士庶集まるのみ 其制定らす。

叉博多のかりしかり 72 さ 也。 甞祭あ あつ **^** b o 尺七八寸、 を作る事博多の山のごとし。 是大内氏全盛の時京都をまなびし事多周防山口にも"六月十四日には毎年祇園の祭とて"二十一のかざり山 せしかば、 田祉はそれより に寄納せしにや。 どり侍べる故、 h ふりて、 傅 此 まれる祭は、 は さ þ 若 はり侍らず。 外年中の小祭多かりしと 山をまなびてつくりしにや。又十一月第二のは、都の祇園をまなびしにや。又十一月第二の れる しきありさまな れど佐依姫は、 時代 佐 里人相傳で松浦佐依姫が寄納せ なが 遊客のともがらは、 作り山もよそほはねば、 今に至て絶ず。 依 はる 姬 前後相違し侍れば、 ひにわび 办? まづしき家は後にはある よその國にもまれ也。 其銘は、不窕不樹感且容之、とし かっ 此社内に古鐘 他所に寄せし鐘 後、 b 宜化天皇の 0 しばに 孝謙帝の す 是等の祭 べて い H 敷を多 見ゆるもお かうやう ども、 御時こ 御時の 山見 里人の説信 なるを 口 は 櫛田 あ þ < んとて遠 雨など久し 人也。 祉 今 > め じまうけ に樹請 卯 Ī 高 か は 0 るまで 人多く 其法 榊 日新 櫛 しつ

けん、 を長 年肥 討んとて、わづか百五十騎を引率し、三月十三日府大 鐘 軍の凶をや示されけん、又乘打したるをや答たまひ 道を西に向て姪濱へと馳行、櫛田の社を打通る時に、 御方なり をは神殿に納めいれ、新鐘を鐘樓に掛たり。 き銘をけ 神殿の扉を二矢迄こそ射たりけ 正五年、 カコ 人相部藤兵衞と云ふ渚、 せる由、 後國住人菊池入道寂阿は、後醍醐帝に二心 受て御覽せよ。 なる神にても め給ふやうやある。 (書て刻みつけ、 ふるき銘をけづ 寂阿が馬一足も進ます。 豊後國綾部玄蕃允と云へる大友の家臣、 しが づりしあと、 京都の人、 、當國姪濱に居たりし採題北條英時を お り去て、新にふつい とて上指のかぶらをぬき出し、 はせよ、 わが寄進のごとくにせり。 先年篤信 今も見ゆ。元祿三年博多の 其儀ならば矢一 新に鐘を一口鑄て、 寂阿が戰場に 菊池入道大に怒り、 12 いひおこせり。 矢を放つと等 筋まわらせ かなる文字 向 元弘三 ふ乘打 古鐘 古

け 常りて死にたりと書り。かりなる大蛇、菊池が鏑に 含てあ 社壇を見れ 馬のす h 事節 しこそふしぎなれ。 ば > りて後、博多の住人奥民部丞久吉と云者 、菊池の射ける鏑矢を、獅子狛犬の口に み直りければ、 さぞとあざ笑て打通り のごとし。太平記には二丈は是九州軍記にしるせる所かく

0網輪天神

綱 に止り、網をしきて坐したまふ所なりと云。博多の網輪の天神の故事城郡高塚村の海邊にも網敷の天神の社あり。 菅丞相左遷の時先此浦 かゞ 12 カコ ያን る のごとし も劇敷の天神とてあり。ごとし。搖津國須磨の浦 場町 5 h 5 は べ と云。 ね せたまひしが、 か る しをし にあり。菅丞相左遷のとき、袖湊に 近古兵燹に ける。 ば、所の海人舟の綱をたぐ 今 其 綱場と稱するはよこなまれるな カ 他分明な 、後に此所に御社を立て、 せまゐらせければ、 海邊にてしか か 此社始は袖湊の入海 5 > りて所 ず。 75 大 h 々に配 カコ せ給ふ 72 そ b, 今 ばら の社 地 世 べき物 をか 綱輪 輪のごと T Ď 船 地 の b 側 御休 の よりあ **~** 天神 邊な にあ な 後

梅松寺成就院と云ふ。眞言宗なり。東長寺に屬す。 慶長元年に正圓と云僧、 つせり。十一月廿五日祭醴あり。社僧の寺を綱輪山 御社を再與して今の 地にう

0个熊野 社

す。 其すぢ土居町の雨かどに、熊野權現の小社あり、是に 祇園の北に今熊野町あり。東西に通ぜり。横町なり。 よつて此町筋を今熊野町と云。今は略して今熊と稱

0夷 社

櫛田祇園の神輿も.六月七日此所に渡御ありて、十 月十四日に、 海中なるべし。昔は箱崎八幡宮の御旅所にして、八 **社も昔は今の社地より東南の方に在しならん。今は** 博多の北の海邊濱口に在。澳濱の夷の社是なり。 海邊もはるかに築出したれば、今の祉ある所は昔の 二日に本社にかへし奉りしと云。 此所まで神輿わたりたまひしといふ。

〇聖 福 寺

刹の第三位たり。近世九皐宗疇と云住持の時、故あ 其申狀にいはく、 を願ひ、申狀を以て大將軍源賴朝卿の嚴聽に達す。 宋人の建立せし百堂の舊跡あり。此所に寺を立ん事 朝す。是日本に禪法傳來の初也。時に博多におゐて し、始て黄龍八世虚庵の禪を傳へて、建久二年に歸 りて關山派となり、今に至て然り。開山榮酉は明庵 と號し、又千光と稱す。後鳥羽院御時文治三年入宋 山と號す。 **榮西開基の寺にて建仁寺に屬** +

榮西言上

欲、備,,大菩薩御法樂。致, 本家御 祈 禱。並建,,立堂 霜。既亦依、爲,佛地。人類不,居住。仍建,立一伽藍。 博多百堂地者。宋人介:"建立"堂舍之舊跡也。而件精 下可\加;守護;之由,者。佛法與隆 之御願。何事如\ 為、除:1凶徒之障碍。且為、備:1向後之證跡。殊被、仰下二、 舍。安,置丈六釋迦彌勒彌陀 之三尊。鎭,護國家。且 含破壞之後。再不,修營,之間。偏爲,空地,雖、送,星

之哉。者 賜;)御下文。欲、遂;,造鶯之功;而已

建久六年六月十日

築西言

上

寫せしめて、遠忌の注會以前より寄附したまふ。 今年 賴朝卿の眞影をひろく求め、山州高雄山に在しを摸 なして遠忌を弔ひ、冥福を祈る。追、遠慕大古、不、忘。 住持丹岩出世賜紫の時に當りしが、 舊恩.其志誠にあつしといひつべし。此時光之公より 佛殿に賴朝の位牌を安置し、毎年忌日に諷經執行す。 隆せり。 元祿十一年正月十三日、賴朝卿の五百年忌に當りし 時には賴朝卿を以て、開基の大檀那とし、古豕より **丈二字の額を宸翰にあそばして賜る。こゝを以て、當** 寺を立、開堂説法す。是よりして日本の禪法始て與 内に五あり。 此書、賴朝卿へ奉りし本書榮西自筆、今に聖福寺に傳 ば、住持丹岩和尚かねてより僧徒をあつめ、法會を れり。 故に後鳥羽院より扶桑最初禪窟の額並に方 賴朝卿の袖判あり。又大なる朱印右の文 賴朝卿則此地を榮西に賜ふ。よつて此 其法財乏くして

掘し力より出たれば、彼等の取しは得べき分也、 送り返さんとす。丹岩かたく制して、是彼傭夫等地を 器をつかみ取しを、監司の輩相議して、是を取返して なるべ る金錢金花銀各一枚をといめ、其餘は悉く丹岩に 舉し難し、其體製皆中華良工の所作にして、日本の製 政公此時江戸に逃職したまひしが、其内文字を刻 にあらず。是古へ亂世に兵火をさけてこゝに埋み 金、其外金にて作れる禽獸蟲魚の形品々多くして、枚 瑞應庵に葬んとして、役夫墓地をうがつ事三四尺許、 しに、壺中の金器、花銀、金花銀、金錢、銀錢 福岡の有司に其由を告しかば、 地中に石あり。其下より忽に一の壺をほり出せり。 町の民三宅傳兵衞が息女病んで死す。 上京逓滯せり。 賜ふ。はじめ壺をひらきし時、役夫賤人等あまた金 たをひらき見れば、壺中悉く金器なり。 丹岩是を封じて邦君綱政公に上つる。 こゝに當年十二月十二日、 監吏來て是を點檢せ 聖福寺の子院 僧徒よ 博多宗湛 團金、片 取 9

返すべ けり。 求 持 世の資用とすべしとて給はりける。 護忠院に寄て開租の祭奠を助く。 内金八兩を彼墓の地主瑞應庵におくり、 悉く集め鑄たりしに、凡二百三十餘匁を得た 是も當寺の西門ありし所也。 きしにやと皆人いへり。此春賴朝卿の遠忌に當り、住 し。彼亡女も亦宿世の善因によりて、かゝる妙果を開 いへども、寺内猶ひろし。 はあらず、丹岩和尚平日の宿徳所威の法福な 内今は民家と成たる所多し。寺の北に西門町あり。 る事をゆるさず。 作ならべて繁榮の寺なりしに、亂世の の出世にのぞみし時なるに、 其志を遂たり。時の人おもへらく、是偶然の僥倖 當昔は此寺の境内甚廣かりしとかや。たがな からず。 兵燹にか > りて、 涩 罪す きく人これを感ず。 べけんやとて、 いにしへは諸堂諸坊所 **皆焦土となりにければ、** 今はむかしにしかずと 誠に希代の奇遇な 其餘は住持丹岩出 つひに翌年上 傭夫等をせ 其後金花 又銀百兩 其界隈 90 る

當國 此寺 附 室膜聖院と云。 給ふよし御朱印を賜る。 多再與の時、漸 繼光庵、寶珠院、順心庵、虚白院、法喜庵、幻住庵、壽싦庵、禪居庵、護聖院、廣福庵、 子院三十八區あり。今は十四區殘れり。節信院、瑞廳庵、子院三十八區あり。今は十四區殘れり。圓覺寺、一枝庵、 長政公入國の後慶長六年三月廿日先國主寄附の され、慶長四年再當國を領せられし時、寺産の 隆景當國 に至て、佛殿三門鐘樓開山堂經藏等造立あり。當昔は 依て、春日村二百石の寺領を寄附したまふ。此寺近年 て、那珂郡春日村の内にて二百石寄附の狀を出さる。 前 せらる。 、無染池質珠院の内五日、通津橋 月朔日 を領せられ 堂是なり。 お を領せられし時、 なじく炎上せり。 |附の證文多く今に残れり。 隆景の養子相繼で||古は寺領も多かりしにや、寄隆景の養子相繼で • 秀吉公より三宅村の内二百石を寄附 二日、聚星閣なり。三日、冷泉亭かならす。 くかたばか 此時那珂郡三宅村にて寺領三百石寄 し時、寺産百石を減せられ、文祿 其後秀秋領地を越前に りに寺院を再造す。小早川 此寺に方丈を建立す。 什物も多く燒失す。此時古より傳來の 十境あり、一 云眞宗寺むり。其前に寺より東北に西教寺と 秀吉公博 日、龍淵 地を改 例に う 四

冥福 紫上野介廣門の女なり。 の 墓所 位牌 あ公の側室、甚四郎の母、築の 墓所 位牌 あ の開 す。「七日、十里松原也、八日、妙理祠鎮守群、「七日、十里松箱崎松八日、妙理祠鎮守 又此寺の東北 田甚四郎政冬なり。法名見桃院春峰道林居士と號す。長德院 又富士のすそ野にて、 事是を見て推はかるべし。此寺に隆景の石塔位牌 毎日勤行の清規一卷今にあり。 十日、鐵塔塔地。そのかみ寺中に僧徒多か なり。「八日、七里灘の間の海をいふ。灘字の説承天寺部の中にある石橋八日、七里灘博多の海をいふ。一説に志賀島より津屋崎 津宮の祉司王藤内が墓も此寺にあり。 わすれが 黑田 墓あり。此寺にあるは隆景逝去の後、住持其恩 Ď 。隆景は備後國三原の城にて棄世せらる。故に彼 山 を助けんために、 松壽一柳伊豆守の于息、如水公の妹のうめる所也。如果 千光の俗弟なれば、 こ たくて、 れは榮西歸朝の時、唐土より從來 の 側に 諷經のために立置し其しる 发に墓をつけるならん。 **曾我兄弟にきられし備前吉備** 歌舞を業とせる倡優 此寺に葬らざれども、 いにしへ り。恰土郡上原村にも 九日、 王藤内は此寺 りしとかや の盛なり h 金河那到。 住 也。 即 此寺 あ 地 其

þ 院の宸翰の額をかゝぐ。經藏を創立して一切經を納 どいへる倡優の類也。寬文十三年住持萬水國君に申 中と稱す。志摩郡泊村の大日、遠賀郡芦屋の念佛な 四方に餬ふ。又茶筅を作てうる。京都の鉢たゝきの をやめ、専淫靡の歌舞を業として俗人を悅ばしめ す。古來の本尊丈六の三佛は、中比兵火に罹て燒失せ て佛殿を立、舊規に隨て釋迦彌勒彌陀の三佛を安置 ごとし。**聖福寺の中に居る故に、國俗是を名づけて寺** 三昧を修せしめられけると云傳たり。今其遠孫念佛 榮西彌陀經を傳へ、僧衣と數珠を授け、寺地をあた **今の三佛は萬水所立也。又三門を立て、** 金松山西光寺と號し、 且諸堂の破壌を修補して、此寺に功をなせり。 九品宗と名づけて、 後鳥羽 念佛

O承 天 寺

院御字嘉禎元年入宋し、経山の佛鑑禪師、無準に謁し 聖福寺の南にあり、 の第口位とす。開山は聖一國師圓彌なり。 萬松山と號す。東福寺に屬して 四

門等もなくなりぬ。近世漸く佛堂は出來にけれども、 ば、 州 寺も亦聖福寺と同 承天新寺を毀たんとす。 王院入法寺、 三門は只礎のみ殘れり。天文廿一年大內家の寄附狀 有智山の訴をおさ 此 字を書てこれを送る。り。本書は東福寺に在。 なりしゆへ、 を請て第一世とす。 仁治三年の秋此寺を建立し、 の時大船を具へ、 の大講肆也っ 新寺の事を聞て、 禪 寬元元年、 を傳 謝 那 國明 ^ 珂 那野馬、 並肥前國神崎郡の內百町地を先例に任 此送物あり。時に宰府有智山寺は、 Ł 七年を經 勅ありて、承天崇福二刹を官寺とし、 彼寺の僧徒等圓爾が禪化を惡 い じく度々兵火にかゝりて、 へ給ふ。 元事釋書に見えたり。崇福寺 其身も同船に乗て來朝す。 ふ富人甚歸依 承天禪寺及諸堂の額諸牌等 圓爾すなはち開堂說法す。 高宮、 て仁治二年歸 執事の者、朝廷に申し 平原、 を施して精含とす。大宰少貳藤原資頼此地 しける 三箇所、 朝 かゞ せ 90 佛鑑能書 圓 同 ん 朱 カ> り 佛纸 で 西 朝

つて察せざるにや。かうやうのあやまり、日本の先輩に多し、海なりと云。難の字侯俗あやまりてなだとよむ故、古人といへ 謝國明の墓は、辻の堂を出て、此寺の東・ 慈視閣なり。 七日、獅子 窟惶堂。八日、圓 日、吹耳閣、書院・十日、梅花 松、三日、冷泉津、四日、寳滿山、五日、覺皇殿佛殿。六日、 尙開基の地也。 院、约寂庵、元亨庵、漽光院、乳峰寺。壽德院、觧勝院、本城院、海藏菴、退耕 せ、 區あり。 秋、慶長四年に寺産百石を減じ、那珂郡春 て百石附せらる。長政公入國の後に、先國主の例に任 せ、寺領とするよし見えたり。文祿四年十二月秀吉公 の正せし例もわり。難は沙石ある河の瀬を云。中華に七里灘といへなればとて、今さら其非をかざるべからず。元亨釋書の誤多きを今 北 O 樂院と云、此寺の南にあり。聖福寺、承天寺十境の内共 られしならん。文書傳はらざれば詳ならす。此前隆景より聖福寺とおなじく寺産寄附せ の側にあり。其上に大なる楠木生たり。又開 百石の地を寄附し給ふ。 那珂郡三宅村にて二百石の寺領を寄附したま 今わづかに十四區殘れり。 此寺の十境、一日、七里灘、二日、十里 廟服他。是なり。 此中海藏庵は是虎關 いに しへは塔頭四十三 庵、四德院、天徳院、常樂院、寶楽庵、天與 筑前中納言秀 通機雄様。九 宰府へ行道 日村 開基せし 、へども営 の内に

ゆべし。もろこしに七里洋といふ所もあり。る境地も海にはあらず。砂石ある川の瀬なり。 なだには斧の字を用

〇東 長 寺 眞言宗

動 隨 南 にといめて、密教東慚して長く將來に傳へん事を欲來る五鈷金剛杵ニム「ー具の物なり。 佛舍利一粒をこゝ水る五鈷金剛杵三鈷ヒム高野山にあり。 佛舎利一粒をこゝ に淹留し、 是也。並多門持國二天の像も自作也。小劒一 師自身の像を作り置けり。 月廿三 南岳とも、 観音像一軀、 吳服町 **b** 身所持 岳 像を作て本尊とす。 其所を勤行の町と云。今勤の字を略して 山實持院と稱す。 東長密寺と號せらる。 日博多に歸著せらる。 弘法大師延曆二十三年入唐し、大同元年冬十 Ò 0) 邊に及べ 由緒あり。 伽藍を一區建立せらる。 南山とも云。 春日山翁作也。 þ 高野山 心經 堂の本尊とす。 大唐より携令に傳へて護摩 大唐より携 子院も多くありしと也。 東長寺の山號も彼山號に 一卷、 大師堂に安置する所の は 又獨鈷杵あり、 此寺始は博多海邊に 翌年四月下旬まで此地 日 大師 本 時にみづから不 0) 自筆也。 南にあ 柄、 其境內今 是は太 る 千 大 故 手 師 像 大

此獨鈷を以て地を指し加持しければ、 清泉湧出すと 應三年二月十二 術を請じて讃をこはる。 村にうつす。三年を歴て再发に建立すといへども、 大師大唐より携へ來て、 西國の僧徒傳法灌頂の道場也。 せらる。忠之公眞言宗に歸依したまひ、此寺の大櫝越 始の半にも及ばず。近世又破壊せしを、忠之公の時 兵火にかゝりて寺院燒失し、佛像什物等志摩郡志登 云ひ傳へたり。今現に彼堂前に靈水あり。 本堂、護摩堂、鐘樓、大日堂等重建し、寺産二百石寄附 獨鈷を當寺先住快傳法印に賜ふて相傳ふ。元弘の 法眼をまねき、みつからの像をゑがゝせ、澤庵 なりたまふ故也。存生の時、 山石井坊の霊寳。養老年中、善無畏三歳此土に來る 岩杉山の嵐に上り行ふ。此地水なき事をうれへ、 殉死の者五人、 H 忠之公逝去したまひしを此寺に 田中五郎兵衞榮潰、 今現に傳はれる物多し。 掲る所の一幅也。此等往昔 江戸におゐて、狩野探 灌頂式の諸具も、 忠之公其 竹田助之 比

進義成 名石碑に刻めり。 尾上仁左衞門勝義、 べて此六人の墓も、 長濱九郎右衞門重勝、深見五郎右衞門重畠、 又山伏明嚴院秀榮も殉死す。す 忠之公の御墓の前にあり。各法

〇妙樂、寺、海宗

ける。 此寺其始は博多の小濱にあり。 榮寺町と云。 此所にむ 逢て、此寺も悉く燒失せしかば、僧徒等假屋を作て居 郡大保の人にして、大國應師の弟子也。花園院正和五 皆海濱にのぞめる寺なる故、名付るならん。呑碧樓 にありし故に、 聖福寺承天寺の間にあり。石城山妙樂圓滿禪寺と云。 は月堂和尚、 三門を呑碧樓と云と、日華が人境錄に見えたり。是 の事也。天文七年博多火災にかゝりける時、 の記を、 かし異賊襲來の防ぎのため石垣を築けり。此寺其所 長政公入國の後、地を改て今の所に移る。開山 大明の靈隱禪寺の住持來復作る。洪武年中 諱は宗規、 石城山と號す。外門を潮音閣と云、 又知足老人と云。 筑前宗像 類火に

州寄附したまふ。 網政公より寺産三十石 今はわづかに二區あり。 朝の正平辛酉の年寂す。七歳古は子院二十七區あり。 年、妙樂寺の開山となる。 り。今田畠六町餘、前君光之公より寄附したまふ。資永 て七十町の寺領つけりといへども、 かみは志摩郡芥屋、小金丸、野北、櫻井、馬場此五村に 寺、永審院と此寺の内にあり。その即宗庵望雲庵、且崇福寺の末 此比創立せしなるべ 乱世の後退轉せ し。南

淨土宗鎮西派

甚多し。 塔頭十六坊あり。今は塔頭一坊殘れり。 寺町西側にあり。 後國善導寺再興の後、康正年中博多に來り、當寺造立 おゐて傳はれり。大府宣及武家豪族より寄せし文書 の願望ありて、終に文明九年に建立成就せり。 上人と云、武州金川の人也。其姓氏しれず。 御時御祈願寺たるべきのよし綸旨を給はる。 學て記しがたし。 此外古き佛像古畵和漢の名筆器物甚多く 潰 寺 光明山悟真院と號す。 交割の多き事國中第一也。 後土御門院 開山は廣譽 此人筑 寺家 今に

都及他邦にも亦稀なり。

〇稱名 寺 一遍宗

號す。 當國におゐては此寺に寓居す。國君より厚く待遇せ 寺なりしとかや。相州藤澤の遊行上人諸州遊歷の時 り。其外武家の文書數通あり。いにしへは世に名有 字を取て稱名寺と云。塔頭六坊慶長年中迄ありしか ども、今は一坊もなし。いにしへ寺領等の寄進狀あ 云。施主は稱阿名阿と云者父子也。父子の名の上の 土井町にあり。 後醍醐帝元應二年開基す。開山を乗阿上人と 故に土井道場と云。金波山西岸院

〇龍 宮 寺 淨土宗鎮西派

宮寺と改し事は、貞應元年四月十四日博多のうみよ に云傳ふるには、此寺初は浮御堂といふ。寺號を龍の云傳ふるには、此寺初は浮御堂といふ。寺號を龍 號詳 ならず。此僧四條院 仁治 二年に 遷化す。寺家 り人魚を捕得たり。 冷泉山視現院と號す。開山谷阿上人と云。開基の年 此由朝廷へ奏聞しければ、勅使

寺に寄寓せり。九月廿七日此寺にて連歌百韻興行あった。 祇法師西國に下り、博多にしばらく居たりしが、此 **参詣する人多し。行基の作と言傳り。文明十二年宗** に逗留せられしによりてなり。寺内に荒神堂あり。 此魚人に似て、海中より出たれば、龍宮より來れる物 といへる意也。叉冷泉山と號せしは、冷泉何某此所 魚をば此寺中にうづみぬ。其後改めて龍宮寺と號す。 事をトひ、國家長久の瑞兆なりと申ける。 其時安部大富といへるうらかたの博士、人魚出現の として冷泉何某下向ありて、暫く此寺に居住せらる。 宗祇が發句に、 やがて人

秋更ぬ松のはかたの澳津風

此懐紙龍宮寺に今もあり。

〇正 定 寺 浄土宗

譽上人と云。 見佛山專修院と號す。知恩院の末寺なり。 は筑後國善導寺十七代の住持也。 後土御門院明應年中に開基せり。 其折から防州大内 開 山を威 威

心僧都のかける曼多羅あり。其圖繪の精密なる事世 附せらる。是によりて正定寺と號す。始は塔頭五區 義與の母正定院といひし人、威譽に歸依し、寺領等寄 ありしが、今は一區もなくなりぬ。此寺の什物に惠 に亦類すくなく見え侍る。

寺産 百石の地を 寄附し たまふ。荒戸山に 東照宮の 作千手觀音なり。什物に實珠あり、美玉也。徑一寸 之公是を改て眞言宗としたまふ。本尊は弘法大師の 寺也。龜山法皇の勅願寺也。故に法皇山の號あり。 神祠を立たまひしは、此後の事なり。大猷院君御薨 毎月十七日に参詣したまふ。尊像は狩野探幽筆也。 三分あり。かゝる寳珠は日本におゐては稀なるべし。 永祿八年の比より淨土宗となりぬ。正保元年國君忠 法皇山寳珠院と號す。むかしは律宗にて西大寺の末 西宮の劒珠、嵯峨鹿王院の玉など、同日の談なるべ し。忠之君より東照權現の神像を此寺に安置せられ、 〇大 乘 寺 真言宗

長寺に古佛の千手觀音あり。是や七觀音の内なるべ 逝 音慈覺大師作、以上六觀音也。今一佛詳ならず。 き。當寺の觀音には、毎月十七十八日參詣の人多し。 音定朝作、乳峰寺十一面觀音作者不知、龍宮寺正觀 正觀音雲慶作、 音とて名佛あり。 の後、 御法事も 此寺にて 行はる。 觀音寺正觀音雲慶作 大乗寺千手観音弘法の作、 凡博多 聖福寺干手觀 妙音寺 に七観

〇妙 音 寺 天台宗、延暦寺に屬す

持せしめられ、承應二年九月、寺産四十石を寄附し、 天台寺とし給ふ。 臨江山梅照院と號す。 君此寺に居たりし比丘尼を、櫛田祠の後片原町にう 焼亡びぬ。近代住持なぐして尼寺となる。先公忠之 造寺と戰て、博多に放火しける時、此寺堂舍も縁起も つし給ふ。眞光庵と號す。妙音寺には、 し云傳ふ。其開基の年しれず。天正年中大友氏と龍 本尊正観音唐土より渡りし 眞言僧良悅を住

〇法 性 寺 日蓮宗

寺町に在、 開基せり。是筑前國中にて、 修昌山と號す。稱光院正長元年、 法華宗最初の寺也。 日親上

〇入 定 寺 真言宗

なる。 所とせられ、所々の御陣場にも圓心を召連らる。其 座郡三奈木の邑に一兩年居たりしが、それより博多 筑前を領せられし後、家臣美作に俗縁なるに依て、 政公建立して寺としたまふ。 寺町にあり、 圓心此所にて入定すべきよしを、長政公に再三請け に來り、今の入定寺の地にありし庵室に入て住 東照宮に御暇を申し、この國に入り、美作が采地下 後駿州安倍郡瀧野の唯心院の住持となれり。長政公 て、十七歲より出家し、三州に往いて一寺の住持 田美作一成伯父唯心院圓心なり。圓心は駿州の人に りかありけん、住持もなく、幽なる草庵なりしを、長 東照宮その人となりを愛し給ひ、 はじめは許容なかりしかども、 松見山自性院と云。其初は何れの時 開山は長政公の家臣黒 終にゆるしを 彼を御祈願 90

附たまふ。光之公誕生の後、御祈願所として毎月當 寺におゐて、 體 山となづく。院號は舊に依て自性院と云。圓心を石 を入定寺と定めたまふ。大徳寺江月和尙に請て寺號 ければ、圓心いさゝか此世に望なく候。但死後に此 をかゝしめ、佛堂の扁額とせらる。此寺山號を松見 年に成就す。圓心が入定したる地なればとて、寺號 經て後圓心の入定しける所に、長政公より佛堂を立 所に佛堂を建立し給はれかしと申ける。是に依て年 より命じたまひ、其料として毎月一石の米を寄給ふ。 たまふ。 たまひ、 し故、近邊の町屋を買添て寺内とす。佛堂は元和七 して寂しぬ。羨七十八。入定の間長政公彼庵に來り おこたらず、慶長十三年八月廿八日眠るがごとくに の地藏に作りて寺の本尊とす。長政公より寺産を 二七日断食して、其後定に入、三時の動行猶 加藤内匠奉行せり。此時庵室の地狹少なり 何事にても望あらば申置べきよしのたまひ 武運長久の祈禱あるべきよし、

今におゐて絕す。

せり。 寺町に 後に同地に埋て置べしと約したまひ、 落髪をあたへ、又みづからのそり髪をも賜はり、我が 前に歸り一寺を建立し、 を大凉院君知たまひ、汝壯年にてむなしく在家に日 寄られ、 の禪に入、ひたすら勤學し、 て黄金五十兩を賜ふ。宗誕命を受て懈しさり、 とて、先考保科彈正忠正直の遺骨、及先妣長元院殿 を送る事本意にあらず、今より遊學して功成なば、筑 開基の時代詳ならず。亂世の時衰廢して、只小庵の かの大凉院君より賜はりし黄金をば、 み殘りしを、寬永五年國君忠之公の助成に依て再典 初遍参の時江戸に在しを、忠之公の御母大凉院君召 あ 此時の住持を生雄宗誕和尙と云。當國の人也。 常に剃髪の為に侍りけり。 9 光 大寳山と號す。開山は無雑純和尚と云。 寺膚綱宗、安國寺金龍寺と同じく、 我先父母のために供養せよ 一食草座の艱難をな 此僧大志ある事 遊學の資とし 佛寺建立のた 公命を傳ふ。 曹洞

關秀公居士。 法名建福院天 之公の外祖父なる故に、忠之公より寺産五十石寄附 まふ。照福院君大凉院君よりも、各米銀を施與へた 詳也。此時當寺破壌におよびたるを再輿すべしと企り下に。此時當寺破壌におよびたるを再輿すべしと企り 是を基として一寺を造立せんとす。此時宗覧長闘寺を建 し給ふ。今に至てしかり。 まふ。是に依て明光寺再興成就せり。 め貯置て少も費さず。 < 國君忠之公其志を感じたまひ、 かの薙髪を同所にならべ埋み、 一壇をかまへ、 同夫人法大姉と云。 學業成就して後筑前に歸 位牌をたつ。保科正直は忠 の塔を立、 白銀材木等をた すなはち正直 塔を立て 大凉院君逝

石堂は則博多東の端なり。川あり、 所と云。 石堂、奥堂、茅堂、脇堂、瓦堂なり。 いにしへ博多に七堂と號する所あり、普賢堂、辻堂、 り箱崎及篠栗の驛に通る道也。 今は佛堂はなくして、町の名のみ殘れり。此 堂 放に此出口を石堂口と云、博多より東へ行道の出口にある所也。 此川は古昔はな 是古昔佛堂の在し 橋を渡せり。 此橋

を通ず。是則今の石堂川なり。昔は承天寺聖福寺の裏 らく水災多しとて、 通りしが、 松原なりしな。 まで箱崎の松原ついきて、今の川ある所ももとより 故に今川と云。 しを、大友の家臣日杵安房守鑑賡ほらせたりと云。 川の流西にめぐりて、洪水の時、 h むかしは比叡川は博多と住吉の 南より北へ直にほりて松原の 水 間を あ

今の辻堂門外のひがし楠木ある邊に居住せしが、 にむかし辻堂ありしと云。辻の堂の屠兒、 に川の東にうつりて町をなす。 博多より御笠郡の方にゆく出口を辻堂口と云。 辻。 堂 なり。故に此出口を辻堂口と云。爾多より南へ行道の出口にある町 それより松原に通ひ むか 此邊

しは

右に記す外、 博多所在寺名

道あり

て往來す。

行願寺 山號寺號を賜はる。洲崎町にあり。は清江山萼賢院といひしが、元祿六年日光御門跡より海印山普賢院、天台宗なり。叡山延暦寺に屬す。此寺初海印山普賢院、天台宗なり。叡山延暦寺に屬す。此寺初

神護寺 眞言宗東長寺に屬す。下同。櫛田社の隣にあり。

願院 馬場新町にあり。

閑松院 對馬小路にあり。

天福寺 萬境山。禪宗濟下。聖福寺に屬す。下同。小山町にあり。

光西寺 産堂山。萱堂町にあり。

東林寺 瑞鳳山。禪宗洞家、加賀大乘寺に屬す。祇園町上にあ りの

西方寺 寶樹山淨。土院淨土宗鎮西派、京都知恩院に屬す、下同。

報光寺 大堂山成善院。奈良屋番にあり。

海元寺 長恩山義弘院。官内町にあり。

一行寺 三笑山日水院。同所にあり。

觀音寺 大悲山。芥屋町にあり。西方寺に屬す。

多福庵 海上庵。洲崎中番にあり。海元寺に屬す。

壽福庵 善導寺に屬す。赤間町にあり。

日水庵 一行寺に属す。辻堂町。

選擇寺 本願山起行院。住吉妙圓寺に屬す。下同。官內町。

榮昌庵 片土居町。

順弘庵 同所。以上淨土宗。

萬行寺 の大寺なり。未寺七十一ヶ寺あり。 眞宗、屬四本願寺。下同。祇園町にあり。當國眞宗一派

順正寺 同所にあり。

圓龍寺 妙樂寺裏町に在り。

善照寺 萬行寺に屬す。下同。祇園町にあり。

覺永寺 今熊町にあり。

妙行寺 袖湊山。川口町にあり。東本願寺に屬す。下同。

西教寺 惠日山、普賢堂町にあり。

本岳寺 連池町にあり。下同。四昌山。日蓮宗、京都本法寺に屬す。下同。

本長寺 松隣山。

本與寺 起雲山。

妙典寺 松林山。

宗玖寺 **榮昌山。屬法性寺。片土居町にあり。**

光專寺 神助山。時宗、屬稱名寺。土居町にあり。

筑前國續風土記卷之四 終